

農業技術短報

№55 2002. 7. 31
三重県科学技術振興センター
農業研究部
畜産研究部

<所感>

○開かれた研究機関を目指して 1

<研究成果の紹介>

- | | | | |
|--------------------------------------|---|--------------------------------------|----|
| ○GPS を搭載した土壌調査支援システムの開発 | 2 | ○シクラメンの1月は種における短期栽培技術 | 10 |
| ○傾斜ミカン園用自走式肥料散布機について | 3 | ○グラウンドカバープランツのマット化有望種 | 11 |
| ○全国卸売業者の青果物取り扱い（入荷・セリ）
実態とその特徴 | 4 | ○安全性に配慮した遺伝子導入法 | 12 |
| ○米ぬかの水田雑草に対する除草効果について | 5 | ○削耕方式の水稲不耕起直播栽培 | 13 |
| ○ブドウ「安芸クイーン」の暗赤色果粒の発現と
アントシアニンの関係 | 6 | ○水稲湛水散播栽培における酸化鉄粉の種子
被覆について | 14 |
| ○シーブドッグを利用したカンキツの鳥害防止法 | 7 | ○小麦を原料とする食品廃棄物の肉豚への給与 | 15 |
| ○オゾンを利用した循環式養液栽培における
培養液殺菌システムの開発 | 8 | ○アマニ油脂肪酸カルシウムと抗酸化物の飼料
添加が鶏肉に及ぼす影響 | 16 |
| ○太陽熱処理はパスツアリア菌が生存しやすい
土壌消毒法である | 9 | | |

<所感>

開かれた研究機関を目指して

科学技術振興センター所長 石川裕一

このたび、4月の定期異動により科学技術振興センター所長を拝命いたしました。

本誌面を借りまして、ご挨拶申し上げます。

科学技術振興センターは平成10年度に設置され、今年度で5年目を迎えましたが、昨年度に「県民満足度の向上」を理念に掲げて、それまでの5公設試験研究機関を科学技術振興センターの内部組織として位置づけ、全体を1つの研究機関として再編整備を行いました。

今後はますます多様化・高度化しつつある生活者のニーズを的確にとらえ、分野横断型の1研究所としての利点を生かした、総合的な研究活動を展開していきます。

平成14年度の研究分野においては、各研究部にまたがるプロジェクト研究を拡大的に展開し、地域産業の活性化、環境先進県づくり、県民生活の安全性・快適性向上に貢献する研究開発を重点的に推進します。研究の取り組みについては、昨年度から「研究評価システム」を立ち上げ、外部の評価委員が参画

することで、「生活者起点」という観点をプロセスに取り入れ、研究課題の決定の客観性や透明性の確保に努めています。

また、科学技術振興センターのホームページでは、各研究部が行う研究開発や各種サービスの内容を広く公開しています。これまでの研究成果をデータベース化した「研究成果等データベース」や、青少年向けのホームページ「みえサイエンスパーク」、メールマガジンによる定期的なニュースの配信など様々な対象・目的に応えられるべく情報提供に努めています。研究員ごとの専門技術分野や過去の研究実績を紹介する「バーチャル研究室」では、インターネット上での技術相談や意見交換が行えるなど、生活者との双方向のコミュニケーションが図れるよう工夫を凝らしています。

このように、科学技術振興センターでは、より県民に開かれた研究機関を目指してまいりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。